中国"社会史論戦"紹介にみられる若干の問題

……紹介と研究の間……

戴　国　煇（たい　くお　ふえい）

はじめに
I　文献の提示
1.　戦前に発表されたもの
(1)　主な単行書
(2)　主要雑誌に掲載された関連ある論文（訳業を含む）
2.　戦後に発表されたもの
II　紹介の内容と流れ
1.　戦後―矢沢康裕氏の業績を中心に―
(1)　紹介をめぐる問題
(2)　評価に関する検討
(イ)　中日両論争の比較について
(ロ)　『読書雑誌』発刊前後の事情に関連して
2.　戦前―田中忠夫，池田孝両氏の業績を中心に―
むすび

はじめに

農業経済を専攻した歴史好きな一学徒として自分は余技に中国近代史を書きあげるべく準備を進めている。中国近代史の全体的構想を語るほどの蓄積はまだまだ筆者にはないが，構想を練りあげる作業過程の一部に必須のものと考えているのは，近代中国における論争史（人文・社会科学双方を含む）を自分なりに整理しておくことである。論争史整理の最初の課題として自らに課しているのは，アジア的生産様式論争から，中国社会性質問題論戦と中国社会史問題論戦を経て中国農村社会性質論戦に至る論争史の整理である。

この課題を遂行してゆくための作業条件（客観的な条件が中心であるが）がもっとも完備していると思われる「場」は，中国大陸とアメリカと日本にあると考えている。

「場」の一つである日本，しかも関連ある資料のもっとも集中している東京に生活の場を得ていることで筆者は恵まれているといわねばなるまい。恵まれていることは資料が豊かにあるだけでなく，専門家たるこの道の先学に直接・間接に教えを乞うことができる条件をもっていることもまた含まれている。有難いことである。

本稿は論争史整理作業のうちでも「中国社会性質問題論戦」と「中国社会史問題論戦」にかかわる日本において「中国社会史論戦」（以下論戦と略称）としてとりあつかわれてきたきわめて限定された部分を，さらに日本人先学の論戦についての紹介と研究を整理することにしぼった整理作業のノートの一部を公開したものである。本丸を攻めるための外濠の埋立て作業，それも捨て石の幾つかでしかないことは筆者自らよく知るところである，御叱正を期待する。

I　文献の提示

1.　戦前に発表されたもの

まず最初に戦前の日本において如何様に論戦が紹介されたかを考察しよう。考察の作業は，関係ある著作（訳業を含む）と論文の提示からはじめられる。

(1)　主な単行書

①　田中忠夫訳，任曙・厳霊峯等著『支那経済論』，中央公論社，1932年。

②　田中忠夫著『支那経済の崩壊過程と方法論』学芸社，1936年。

③　平野義太郎・宇佐美誠次郎訳，ウイットフォーゲル著『支那社会の科学的研究』，岩波書店，1939年。

④　藤井正夫「社会史の論戦」（藤田親昌編『支那問題辞典』所載，「文化運動」の項所収）中央公論社，1942年。

(2)　主要雑誌に掲載された関連ある論文（訳業を含む）

（i）『満鉄支那月誌』（上海，南満州鉄道株式会社上海事務所研究室発行）掲載関係論文。

⑤　嘉村満雄訳，熊得山「支那の土地制度」，第6年2

号，1929年11月。（なお本訳文は熊著『中国社会史研究』，1929年，上海崑崙書店版の第2章「中国的土地制度研究」中の第2節より第8節までを翻訳したもの）

⑥ 宮本通治「支那の農村経済に関する一つの観察(一)，(二)，(三)」，第6年2号，3号，第7年6号，1929年11月，12月，1930年6月。（ただし第7年6号登載の第3論文のメインテーマは「支那農村社会の封建的性質に就て」とあって，それまでの論文名が副題となっている，なお著者は第3論文のはしがきに断り書き「本編は主として『接受国際対於農民問題之指示的決議』(『布爾塞維克』第2巻第10期所載）の要領を紹介しつつ，支那共産党の，支那の農村経済に関する観察を，読者に提供せんが為めに執筆し始めたるものに係り，その第一回（満鉄支那月誌通刊第30号）に於て，私は先づ上記決議の冒頭に掲げられた第一章『中国農村経済の特点』について抄述し，第二回（満鉄支那月誌通刊第31号）に於て，支那社会の封建性に関する一般的記述を試みた。そうして支那の共産党が，支那農村経済関係は『一種の半封建制度』なりとする立言の内容を吟味せんとして筆を措いてゐた。今此の点から始めつつ，本編の続稿を書く。」を附している。

⑦ 大塚令三による書評「陶希聖著『中国社会与中国革命』，1929年11月，上海，新生命書局発行」，第6年3号，1929年12月。（評者の大塚によると「陶希聖氏は専ら『新生命』に筆を執り，主として支那の社会に関する研究を発表している篤学の士である。『新生命』は周佛海氏を主筆とする国民党右翼の儒教的三民主義者の機関雑誌で，周氏が漢口へ転住後は，陶希聖，薩孟武，樊仲雲の三氏が編輯に当っている。『新生命』の同人たる点から推断すれば，陶氏の思想的傾向は恐らく右翼に属するのではなからうか。『中国社会与中国革命』に現われた陶氏の見解は，明かに右翼のイデオロギーの上に立ってゐる。」とされ，大塚はさらに「本年初頭に出版された陶氏の『中国社会之史的分析』（新生命書局刊）は，熊得山氏の『中国社会史研究』（崑崙書店刊）と共に，支那の社会に関する纏った記述として頗る好評であった。（陶氏の著書は10月3版を出し，熊氏のは10月4版を刊行した。）」と記して当時の出版状況と陶希聖観を伝えている。

⑧ 嘉村満雄訳，李達「現代中国社会の解剖，①，②」，第7年1号，同3号，1930年1月，同3月。（訳者註によると「本稿は，李達氏が特に『満鉄支那月誌』の為に執筆寄稿されたものに係る。本号に登掲された部分は，曾て同氏が雑誌『現代中国』（第2巻第4号，民国17年10月16日）に於て試みた社会学講座の第一講を為すものであるが，該講座は，『現代中国』の廃刊と共に第一講のみで中絶していたものである。今，同氏は更に稿を新たにして本誌上に於て支那社会に関する犀利なる解剖を試みんとする。それは今後数次に亘って本誌に掲載される筈である。」とされ，著者については「李達氏は，1920年代の初期に或る政党に属したことがあり，永らく長沙の湖南大学に於て社会学の講座を担任した。国民革命軍の武漢占領後，中央軍官学校の教授となり，1927年初夏，上海へ移り，現在は専ら著述に努めてゐる。『中国産業革命概論』，『現代社会学』等の著作があり，社会科学に関する訳書が多い。」といわれる）。

⑨ 大塚令三による書評「李季著『馬克思傳』，1929年12月，上海，平凡書局発行」第7年1号，1930年1月。（われわれの興味は大塚の書評そのものにはなく，むしろ李季についての紹介にある，大塚は「社会科学に関する資料又は訳書の多く＜最近の中国人によって成れるもの――筆者注＞が日本語からの重訳又はその影響を多分に受けてゐるにも拘らず李氏の『馬克思傳』は全然英，独書に基づいて，書かれたものであることは特筆に価する」と述べて，さらに「支那の社会運動史上に李季氏の名を発見するのは可成り以前からである。陳獨秀氏が主宰した雑誌『新青年』紙上にも屢々優れた論文(注1)が登載され，トーマス，カーカップの『社会主義史』，ウェールナー，ゾムバルトの『社会主義及社会運動』の訳書の如きは，支那の近代社会科学に関する文献の最初のひとつとなれるものであるにも拘らず，李氏の名が邦人の間に余り有名でないのは，氏が実践的な闘争に参加せずして，専ら学究の士として象牙の塔に在ったからであらう」といい，あわせて本書は「嘗て中国共産党華かなりし頃（1926年12月）に上海で出版されたものの再版で，今次のものは南京政府の長老蔡元培氏の題字が附されてゐる。之は明かに，李氏の最近に於ける思想的立場の変化を物語るもので，昨年12月20日の『紅旗』第63号は氏がトロッキーズムに堕したの故を以て中国共産党から除名される旨を掲げてゐるが，この事実は学究の士としての李氏の立場を云為するものではなからう。……李氏の経歴に就ては詳かでないが，民国15年冬の頃には，上海大学社会学科に於て，経済学，経済学史，社会進化史，社会主義史の講座を担当してゐた。民国16年上海大学の封鎖後は一時武漢へ移ったが，最近は上海に在住。著述に専心して居られる。」とする）。

⑩ 宮本通治による資料出版紹介「支那の資本主義発

達に関する著書数種」，第7年1号，1930年1月。（宮本は「一，近代支那社会の，経済的発展を対象として取り扱った著書が，最近支那人自身の手によって，恐ろしく多量に，生産されてゐる。その主なるものとしては，李達編『中国産業革命概観』（上海崑崙書店刊，1929，1，26初版，東京，東亜経済調査局経済資料第15巻第7，8号に全文訳載），侯厚培著『中国近代経済発展史』（上海大東書局刊，1929，9，満鉄支那月誌第6年第3号に紹介文あり＜因みに上記紹介文による出版月は10月となっている，筆者注＞），朱新繁著『中国資本主義之発展』（上海聯合書店刊，1929，12，5）などを数へ得る。この他にも郭真著『中国資本主義史』（上海平凡書局，1929，11，17），陶希聖著『中国封建社会史』（なお本書は上海南強書局によって1929年6月に刊行されたもの――筆者注）など屈指に遑ない。二，これらの著書の共通的特徴は，前世紀の中葉支那が，初めて諸外国と，その所謂不平等條約を締結して以来の，支那社会の経済発展の全盤に渉って，その鳥瞰的記述を試みんとした点に存する。それは見方によって，これらの凡ての著作が書名の如何に拘らず，支那近代に於ける資本主義の発達を取り扱ったものであると言ひ得る。これはまことに好ましき流行の一つで，それは矢張り目下日本の読書界に盛行してゐる日本の資本主義発達史に関する著作の，よき意味の模倣であらうと思ふ。唯支那に於る資本主義の発達そのものが日本と違って可なりに怪しげな，そして徐々たる進行を歩んでゐることと，統計的資料が破天荒に欠如している事と相俟って，思切った想像論を試みぬ限り，今のところ支那の資本主義発達史を手際よく纒めることは，よく出来たにしても可なりに多くの困難を伴ふものと思はれる。三，近代支那の資本主義的発達を論じたものは，併し1929年が皮切りでない。少くも，私の知る限りに於ては，1923年6月7日の日附で書かれてゐる屈維它氏「中国の資産階級的発展」（前鋒創刊号，1923年，7月所載，尚新青年社叢書中国革命問題論文集63頁以下に載録してある）などは，此の方面に於て，支那人仲間の先覚者の一人でないかと思ふ。その証拠にこの後に書かれたものは，何程かの程度で屈維它氏を模倣し，又は敷衍してゐる。少くともこれにヒントを得てゐることを否み難い。四，支那に乏しいことは，外国人は言ふまでもないが，支那人自身が充分承知してゐるところで，支那自体に就ての統計数字が屢々日本から逆輸入されてゐること敢て珍らしからぬが，支那人自身の作った統計としては，たった一つ農商統計があるだけである。従って数字を必要とする場合には，嫌応なく，この農商統計に拠らざるを得ぬ。ところが農商統計は中華民国3年より10年まで（1914年～1921年）8回出ただけでその中完全なものは，僅かに3回しかないと言はれ，最も新しいものも今から9年前である。しかもそこに包含されてゐる統計が先進国に於る統計程の正確さを持つかどうか，甚しき疑問である。殊に農業統計の如きは，多くの人々が，屢々引用するところのものであるが，その極めて当にならぬことに就ては，劉大鈞氏がその名篇「歴代田畝の統計」（経済半月刊第2巻第11期所載，尚中国経済学社，社刊第1巻「中国経済」中に載録してある）に「農商統計表中の田圃面積」及「農商統計の分析と比較」の2章を設けて，詳細に指摘している。五，最近続々現れてくる資本主義経済の発達に関する著書も，少くも農村経済を論ずる限り例外なく，農商統計を唯一の手がかりとする関係上，記述がどの程度に正確なるか，遽に信用出来ぬ様な気が我々外国人にはする。六，これは独り農村経済のみに関するものでなく，恐らくは貿易統計を除く他の方面に於ても，同様の疑念を抱く事敢て不当ではあるまい。我々は支那の資本主義発達史が続々刊行され，我々をして，応接に暇なからしむる現在の傾向を喜ぶものであるが同時に，それは併しその研究の方法と態度に於て一段の工夫が必要でないかと思ふ。」と当年の中国における資本主義発達に関する研究および出版事情についてコメントする。

⑪　嘉村満雄・小松重雄訳，熊得山「中国農民運動の史的研究」，第7年2号，1930年2月。（編輯者は注において「著者熊得山氏は，湖北の人，曾て武昌の中山大学に教授たり，現に上海に在って，支那社会の研究と述作に従事する篤学の士である。曾て日本に遊びたる事あり，上海崑崙書店より出版したるその著『中国社会史研究』は，その考証の該博なると，研究的立場の科学的なるとの故を以て，洛陽の紙価を高からしめた名著である事は，人のよく知る所であるが，その他の訳著も少くない。」と述べた後，あわせて「本篇は農民問題に就て特殊の興味を持つ著者が特に「月誌」の為めにその蘊蓄を傾けて，農民運動の史的研究を発表せんと試みたものである。」と記す。

⑫　嘉村満雄訳，陶希聖「中国社会の封建性」，第7年6号，1930年6月。（編輯者注は「本稿の筆者陶希聖氏は，国民党中間派の理論家として有名な新進の社会学者である。その名著『中国社会之史的分析』（民国18年1月出版・上海新生命書局）は，東亜経済調査局の『経済資

料』に訳載（昭和4年11月，第15巻第10・11号）され，『中国封建社会史』（民国18年6月・上海南強書局刊）の邦訳は，田中忠夫氏によって，本年1月以降の雑誌『東洋』に連載され，更に小倉隆氏によって，その「支那に於ける封建制度の消滅」（雑誌『新生命』民国18年3・4・5月号連載，後に新生命書局から出版された『中国社会与中国革命』に輯録せられた）の一文が，本年5月以降の雑誌『満蒙』に訳載せらるゝなど，その論稿は我国の支那研究家の間に於てもかなり注目せられてゐる。茲に掲げた「中国社会の封建性」は陶氏が『満鉄支那月誌』のために特に執筆寄稿せられたるものに係り，氏が専ら研究の対象として居られる支那社会の封建性に解明を与えんとするもので，その独自の観点の犀利さは，氏が属するところの思想的傾向の如何に拘らず，充分推奨に値するものである。陶氏の経歴について前掲『経済資料』の「訳序」は，若干の相違があり，その他にも多少誤り伝えられてゐる点があるようであるから，以下にその略歴を示して訂補しておく。陶希聖氏，名は棠曾，民国11年（1922年）北京大学法科を卒業，安徽省法政専門学校専任教員となる。後，上海商務印書館の聘に応じて来滬し，同館法律政治編輯事務主任となり，傍ら上海法政大学・上海大学で親属法を講じた。（親属大綱・商人通例釈義等の著作がある――何れも商務印書館出版。）1927年国民革命軍北伐部隊が武漢に到るや，武昌の中央軍事政治学校の政治教官となり，軍事委員会総政治部秘書を兼任した。翌1928年，引続き中央軍事政治学校政治主任教官であったが，辞職後，上海へ移り，爾来専ら支那社会の研究に従ひ，周佛海，梅思平の諸氏と共に雑誌『新生命』を創刊した。著書に『中国社会之史的分析』・『中国社会与中国革命』・『中国問題之回顧与展望』・『法律学之基礎知識』，訳書に『オッペンハイマーの国家論』・『マルクス経済学説的発展』（改造社版，その一部を担当）等がある」とあわせて記す。

⑬　小倉隆訳，方峻峯「トロツキー派の中国社会論」，第7年6号，1930年6月。（なお訳者の小倉は「本編は『新生命』第3巻第5号<民国19年5月1日刊行>に掲載されたものである。訳者は未だ方峻峯氏の経歴等に関して識るところがない。併し解党問題に就て，又両派の理論並に工作に就てかなり通じてゐる人であることは本編で以て判る。」と注記する）。因みに方峻峯は陶希聖のことである(注2)。

⑭　大塚令三による書評「朱新繁著『中国革命之過去現在与将来』，1930年5月，上海聯合書店発行」，第7年6号，1930年6月。（大塚によると「本書は，『中国革命与中国社会各階級』の上篇として出版されたもので，近く刊行されるところの『現代中国社会各階級』と対照して一本をなすもの」とされ，さらに「下篇の『現代中国社会各階級』は，反動出版物（当時の国民党は左翼を反動と称した――筆者注）としての嫌疑を受け，現在市党部（いうまでもなくこれは国民党の市党部のこと――筆者注）当局の査閲を受けてゐるから，或は出版前に発行停止となるやも計り難い。」とし，本書は著者の朱から贈られたものと記す一方，本書の梗概を紹介した上で「唯，本書の結論たるべき「中国革命の性質及びその前途」は，朱氏自らの記述でなく，その大部分をスターリンの『中国革命与中共的任務』（満鉄支那月誌〈通刊〉第36号57頁所載，拙稿第113項参照）から引用せるものであるのは如何なる理由か。」と疑念を提起し併記する）。因みに，刊行があやぶまれていた『現代中国社会各階級』がその後上海聯合書店によって1930年7月に出版されたことが無署名記事として『満鉄支那月誌』の第7年8号（1930年8月）に報ぜられている。

⑮　嘉村<満雄>訳，李鏡如「支那農村社会の階級層に就て」，第7年8号，1930年8月。（嘉村は本稿翻訳に当って「最近の陶希聖氏によって公にされた『中国問題の回顧と展望』<『中国問題之回顧与展望』，上海新生命書局，1930年5月刊行――筆者注>中に蒐録された李鏡如氏の「中国農業人口之階級的分析」と題する一文は，その前半は，北京農商部の陳廉な統計によって充されてゐるが，後半の「農村社会に於ける階級層の分析」は，支那研究家にとって，可成り興味ある問題であると思ふから，左に簡単にその部分を訳載する。」と断わっている）。

⑯　小松重雄訳，陳非雲「支那社会史に於ける数箇の基本問題――熊得山氏の「中国社会史研究」の批評(一)，(二)」，第7年9号，10号，1930年9月，10月。（論文の内容から陳は当時の中共の立場に立つ人のようである。それがゆえに訳者も編輯者も従来のごとく原論文の出所ならびに著者紹介を行なわなかったと推測したい――筆者注。）

⑰　嘉村満雄訳，逸歴「『中国社会の封建性』を読みて(一)，(二)」，第7年10号，11号，1930年10月，11月。

⑱　朱伯康「中国封建制度の史的考察(一)，(二)，(三)」，第7年12号，第8年2号，3号，1930年12月，1931年2月，同3月。（訳者名および訳者の注記共に明記なし）。

⑲　大形孝平訳，陳翰笙「封建社会の農村生産関係」，

第8年2号，1931年2月。（因みに本稿の原論文は『封建社会的農村生産関係』で当時国立中央研究院社会科学研究所社会学組主任であった陳翰笙の著で1930年12月，同研究所農村経済参考資料の1冊として刊行されたもの——筆者注）。

⑳ 陳菲芸「中国の土地所有形式(一)，(二)」，第8年3号，4号，1931年3月，4月。

㉑ 天野元之助訳補，陶希聖「支那に於ける婚姻と家族の発達(一)，(二)，(三)，(四)」，第8年3号，4号，5号，6号，1931年3～6月。（訳者によると本論文は陶希聖の本誌に対する特別寄稿論文であるという）。

㉒ 陳翰笙・王寅生「支那の社会の構造に関する研究活動」，第8年4号，1931年4月。（訳者名は明記がないが訳文の後記によると「此れは国立中央研究院社会科学研究所の研究活動を同所員が自ら紹介せるもので」ある。）とする。

㉓ 天野元之助訳，朱其華「支那に於けるブルジョア・イデオロギィの史的発展(一)，(二)，(三)，(四)，(五)，(六)」，第8年8～12号，第9年1号，1931年8月～12月，1932年1月。（訳者天野が最終訳文の末尾に附した附記によると「朱其華君は四川の人，その本名は知らず。新繁，佩我，其華等の名に於て公けにせられた論著は尠くない。訳者の識る範囲に於て最も早く出た書物は，朱新繁の名に於て出た『中国資本主義之発展』（1929年12月，上海聯合書店刊）であらう。ついで出た『中国革命与中国社会各階級（上集，下集）は当局の忌避にふれて焼燬せられ，1930年11月新生命書局より出版の『中国農村経済関係及其特質』も亦，国民党中央宣伝部より発禁の厄に遭ひ，上海公安局に渡されて焚かれてしまった，1931年7月彼は朱其華の名に於て新生命書局より「中国社会的経済結構』を出したが，発禁等のことなくして済んだ」とされる。なお本訳文の原論文は朱其華の稿本によったと天野教授は氏の「過ぎ去った歳月」において記してある(注3)。

㉔ Y・K生訳，朱其華「1925～27年中国大革命に於ける農民運動(上)，(下)」，第9年1号，2号，1932年1月，2月。（原論文の出所についての言及なし）。

㉕ 小島（重雄か？）「支那の社会科学作家，(一)，(二)，(三)」，第9年5・6・7合併号，8・9・10合併号，11・12合併号，1932年7月，10月，12月。

(ii) 『満鉄調査月報』（大連，満鉄調査課発行）掲載関係論文。

㉖ 山口慎一訳，朱其華「中国経済の現状と将来，(一)，(二)，(三)，(四)，(五)」第12巻8号～12号，1932年8月～12月。

(iii) 『東亜』（東京，東亜経済調査局発行）掲載関係論文。

㉗ 周谷城「中国農村に於ける封建的搾取」，第5巻5号，1932年5月。（編輯部の断り書きによると本論文は『学術月刊』第1巻第2期に掲載された「中国農村変乱の根源及その前途」の第2節を訳出したものである）。

㉘ 朱其華「支那銀行資本の特殊性」，第6巻1号，1933年1月。（訳者の後記によると本論文は朱の「支那経済を論ず」と題する論文の第4節を訳出したとあるが，元の掲載誌は明記がない）。

㉙ 朱其華「中国ブルジョアジーの反革命的役割」第6巻3号，1933年3月。（原論文の出所は明らかにされていない）。

㉚ 池田孝訳，李季「支那社会の発展段階(一)，(二)，(三)」，第7巻1～3号，1934年1月～3月。（訳者注によると本論文は李季の「中国社会史論戦に対する貢献と批評」<すなわち『読書雑誌』の『中国社会史的論戦第2輯』，第2巻第2・3期合刊所載論文のこと——筆者注>の一節を訳出したものである。訳者の池田はさらに同じ注において「かくまでに熾烈に，彼の国に於て，中国社会史の発展段階如何について論争が重ねられて居るにもかゝはらず，我が国の支那研究家は依然として惰眠を貪りその一端をすらも，これ紹介しようとはしない。彼等旧中国研究界の或る者は，その甚しきに至っては，『中国書物を通じて知識を吸収するまでには，中国は発達して居ない』など，誠に呆れたことをすら平気で言って居る。彼等を称して認識不足者だと言うよりは，むしろ彼等は中国研究を標榜してこれを飯の種となしている蠹賊であって，中国現代語を読み得ない者だ，と断言せざるを得ない。我らは少くとも中国に関する知識を吸収するまでに中国は発達して居ると信ずるものである。」と嘆いている。池田はまた著者を紹介して曰く「李季，字を季子と呼び，湖南平江に生れ本年37才。家貧しかりし為，親友の助を得て北京大学を卒業し，後欧洲に赴いて独逸に留学し，そこで共産党に入党した。1925年帰国するや，上海大学社会学系の主任となりたるも，施存統と権利の衝突を来して志を得なかった。武漢政府失敗後は上海に遁れて著作を業としている。1930年共産党より除名されて取消派の一員となり，今では極度に反ボルシェビキ的なAB団に加入し，AB団の理論家として知られて居る。」とする。

㉛ 池田孝「支那に於ける支那研究の回顧と展望」，第

7巻8号，1934年8月。

(iv) 『唯物論研究』(東京，唯物論研究会発行) 掲載関係論文。

㉜ 田中忠夫「中国に於ける社会科学研究の現状」，通巻第14号，1933年12月。

㉝ 平野義太郎「支那研究に対する二つの途——支那研究の史的現状に関する若干の評註——」，通巻第20号，1934年6月。

(v) 『歴史学研究』(東京，歴史学研究会発行) 掲載関係論文。

㉞ 鈴木俊「陶希聖と中国政治思想史」，第1巻2号，1933年12月。(鈴木の後記によると本稿は北京大学出身の張宋和氏の手記を基礎としたものであるという)。

㉟ 志田不動磨「最近の支那社会経済史研究」，第1巻3号，1934年1月。

㊱ 鈴木俊訳，伍啓元「支那に於ける社会史研究の概観(一)，(二)」，第3巻2～3号，1934年12月，1935年1月。(訳者の断り書きによると「本稿は伍啓元氏著『中国新文化運動概観』<1934年，上海現代書局印行>中の第13章「社会史的論戦」の條を翻訳し，それに多少の補足を加えたものである。」とされ著者については「著者伍啓元氏は上海滬江大学の出身，曾て清華大学の研究院(大学院)に於いて研究を続けられたことのある若き学徒であり，本書は最近に於ける支那の出版物の中で頗る有名なものであると聞いてゐる。」と紹介する)。

(vi) 『思想』(東京，岩波書店発行) 掲載論文。

㊲ 郭沫若「支那社会の歴史的発展段階」，第97号，1930年6月。

以上われわれは長文をいとわずに，戦前日本文になって発表された「中国社会史論戦」関係の論文，論戦参加者の著作の訳文，さらには論戦の旗手のプロフィルと当時の中国における出版事情をまでおりこんだ形で提示してきた。

われわれのとった提示の方法は単行書と，当時陣痛期にあった中国の新しい社会科学の動向を比較的に敏感にとらえて日本人に伝えようとした雑誌(雑誌主宰者と編輯者ならびに執筆者の主観的意図はさまざまなものがあったと考えられるが)を区分けし，発表年月日を基準に時系列にリストアップする方法である。そうしたのはいうまでもなく，「中国社会史論戦」の日本への紹介を一つの流れとして把えるのに便利であることが筆者の第1の狙いである。第2として期待しているのは，当時期(1920年代後半から1930年代前半)はまさに日本人研究者にとっても新しい科学的な外国研究(遺憾ながら心ある研究者の多くはそのおかれていた歴史的な条件下で主体的においてさえ中国を正しく外国とみなして研究はできなかった)をいかにとり組んでゆくべきかを模索していた時期であったし，模索を相対的には許されていた時期でもあったとわたくしは考えている。この考えがもし許容されうるものであれば，日本人研究者の当時直面した中心的な課題は，アジア的生産様式論争，「中国社会史論戦」(それは「中国社会史論戦」と名づけられた論戦そのものよりも，論戦の背景となった当時の中国のすさまじい革命への胎動の実態とそれにまつわる知識人〔学生を含む〕の混乱の諸様相ならびに科学的な革命理論掌握のための苦吟等を直視し整理すること)さらには前両者に続く「中国農村社会性質論戦」をいかに受けとめ，自らの現代中国研究に如何様に正しく，科学的にとり組んでゆくべきかを考えるにあったと想定できる。先にもお断わりしたように「アジア的生産様式論争」と「中国農村社会性質論戦」は暫時本稿のわく外におくとして，「中国社会史論戦」を如何様に受けとめ，それが研究に生かされていったかどうかを検証するにわれわれの提示の方法は便宜を供与できるものと考えるのである。

第3は論戦関連資料や論戦旗手に関する資料と当時の出版事情を調べるに容易でない昨今の事情を勘案して資料の所在を明示することにある。提示の文中においても明示したように，一部の中国研究者の論稿は，関連雑誌への直接寄稿であること，特に当時の日本帝国の力を背景にした「大満鉄」の上海事務所研究員が客観的にもちえた一定程度の言論の自由(もちろんそれを生かすも殺すも研究室のメンバーの主体の問題であって，この意味において伊藤武雄氏を核とした天野元之助，宮本通治，大形孝平諸氏の活躍，資料と当時の上海を中心とした中国人社会科学者の苦吟の状況を誌面を通して残してくれたことを多としたい)を活用した誌面作りの成果は今となっては貴重なものであるだけに，資料の所在を明らかにするのもあながち無駄なこととはならないであろう。

それはさておいて，衆知のようにわれわれの尊敬する日本人の科学的現代中国研究者は「満州事変」を契機とした急速なる中日戦争への傾斜にともなって，科学的な中国研究のための資料紹介も，中国革命の底流の実態紹介もまた許容されない状況へと追いこまれ，科学的研究などはいわば夢物語となっていった。戦後，日本における民主化にともなって恢復否，より拡大されてきたともいえる言論の自由度と学問研究の自由度の状況下でわれ

われの先学は戦前の業績との関連で何を研究したのであろうか，それに言及する前に，われわれの論理の展開の便利を計るため，戦後における論戦の紹介と研究を提示しておきたい。

2. 戦後に発表されたもの

管見ではあるが公表された比較的にまとまった紹介文と論文は以下の4点である。

㊳ 里井彦七郎「中国社会史論戦」（平凡社『世界歴史事典，第12巻』所収，1955年8月）。

㊴ 矢沢康裕「労農運動と中国社会論」（野原四郎他編『講座近代アジア思想史Ⅰ，中国篇Ⅰ』所収，1960年12月10日）。

㊵ 矢沢康裕「中国社会史論戦」（平凡社『アジア歴史事典，第6巻』所収，1960年12月13日）。

㊶ 野原四郎「読書雑誌」（平凡社『アジア歴史事典，第7巻』所収，1961年5月20日）。

なお研究者には滋賀大学の中嶌太一氏がおられるが，「中国社会史論戦」に関する論文の公表があったことを知らない。（わたくしの手もとには氏の「中国近代化論争について」〈1969年8月22日，アジア経済研究所の研究会「中国関係新聞・雑誌の書誌的研究」（主査・江副敏生氏，幹事・小島麗逸氏）における報告レヂメ〉があるだけである。）

Ⅱ 紹介の内容と流れ

われわれの本節における問題接近は逆時系列に，すなわちもっとも新しい論文から検討して，さかのぼって紹介と研究との間の問題を考えてみることにする。一般的にいって外国研究の場合，翻訳紹介から質的な転換を経て研究の深化に進んでゆくことが，理想と考えられうるし，最新の論文はそれまでの業績の累積の結果として想定できるからである。

1. 戦後——矢沢康裕氏の業績を中心に——

検討の対象は矢沢氏の執筆せる㊵論文（以後本稿で提示した文献を扱う場合は便宜上筆者が編んだ番号を以て代用する）におく。本論文は『アジア歴史事典』に載ったものであるから学界における通念で考えるなら（日本の学界ではまだ通念とはほど遠い感覚にあるようであるが），きわめて濃度の高いエッセンスであるべきであろう。

(1) 紹介をめぐる問題

矢沢氏はまず「中国社会史論戦」を「1927年の中国革命失敗後，中国革命の性格をめぐって行なわれた論争」と規定する。

次に論争の背景として「1927年の「大革命」は蔣介石の反革命クーデタによって失敗に終ったが，これは左翼的インテリゲンチャに失望をあたえ，中国革命についての深刻な反省をよびおこした。」と記しさらに論争の経過として「はじめ中国社会性質問題は，＜中国農民＞，＜中国工人＞，＜思想＞，＜新生命＞，＜前進＞，＜東方雑誌＞上で論じられたが，陶希聖＜中国社会之史的分析＞（1929）および郭沫若＜中国古代社会研究＞(1930)が出版されると，両者の間に論争がはじまった。さらに30～31年，＜読書雑誌＞が中国社会史論戦専号を刊行するにおよんで論争は最高潮に達した。この論争は35～36年中国農村社会性質論戦として継続した。」と紹介する。

第4に矢沢氏が紹介しているのは論争における問題意識である。矢沢氏は「中国社会史論戦の問題意識は，中国革命をどのように導くべきかという点にあり，(1)革命の高潮（これは王礼錫の論文「中国社会史論戦序幕」(注4)の直訳であるため熟さなく，“高まり”もしくは“盛りあがり”とでも訳すべきであろう）はやってくるかどうか（革命の条件はあるか），(2) 革命の性質はブルジョア革命か社会主義革命か（中国社会は封建社会か資本主義社会か），(3) 中国革命の対象は帝国主義と封建勢力か（帝国主義が中国におよぼしている影響はどのようなものか，封建勢力は存在するか）ということが問題となった。」と紹介する。

筆者がこれまで整理してきた矢沢氏の「中国社会史論戦」に関する紹介は，ほとんどを王礼錫の前掲論文と王宜昌の「中国社会史論史」(注5)におうもので矢沢氏自身の特別なる見解の表明はない。むしろ間違えて紹介している個所があるので今後の研究の前進のために付記しておきたい。それは氏が論戦の経過においてあげている論争関係雑誌が量的に不十分であるばかりでなく，あげた雑誌のうち最初の2誌＜中国農民＞と＜中国工人＞は，＜中国工人＞はともかく氏が「中国社会史論戦」を1927年の中国革命失敗後に始まると規定する立場をとる以上，＜中国農民＞誌は一応不要となろう。なぜならば王宜昌が前掲論文において当該誌を論争掲載誌としてあげているのは「5・30前後之中国社会史論」段階の雑誌であっても1927年以後の論争関係誌としてあげているわけではないからである(注6)。

(2) 評価に関する検討

それはさておいて，われわれが矢沢論文にもっとも興味を抱く部分は論戦を日本の資本主義論争と比較した個所と，論戦に対して矢沢氏が下した評価である。

(イ) 中日両論争の比較について

矢沢氏は日本の論争との比較について「29年前後日本でも資本主義論争が行なわれ，中国社会史論戦もそれに深く影響されているが，日本の場合には(1)(すなわち『革命の高潮はやってくるかどうか〔革命の条件はあるか〕』のこと）のような問題意識はみられない。」と指摘する。矢沢氏がほぼ同じ頃に書いた論文とみられうる（発表時期から推して）㉙論文で同じく日本との比較を「中国社会の性質問題をめぐって，1931～33年，『読書雑誌』を中心に活発な論争が行なわれた。これを「中国社会史論戦」とよぶ。ちょうど日本でも，「日本資本主義発達史講座」（1932～33年刊）が刊行され，「講座派」と「労農派」の間に「資本主義論争」がたけなわのときであった。」と書き，続けて㉚論文と同様の「中国社会史論戦」の問題意識を三つあげた後，「これらのうち，(ニ)，(ホ)のような問題意識は日本の「資本主義論争」にもあったが，(ヘ)については，このような問題意識は中国の場合だけのように思われる。それは，革命の経験の有無というちがいによるのではないだろうか。中国の場合には，日本の場合よりも，革命意識がはるかに強かったといえる。」と記す。

上記に整理再録した「中国社会史論戦」と「日本資本主義論争」の比較においてわれわれはすくなくとも次の三つの問題があるように思う。

問題の第1は，中国の論戦が日本の論争に深く影響されているとみる矢沢氏の見解である。矢沢氏の上記の叙述だけでは何に根拠をおいて深く影響されていたとみるのかがはっきりしない。『読書雑誌』と『資本主義発達史講座』の刊行年の形式的な比較から出した軽卒な結論とは考えたくない，それだからといって中日両国における論争の始点を考証した痕跡もまた認めがたい，両国における論争の相互関連についての言及も矢沢論文にはみられないだけに問題は深く残ろう。

中日両国における論争史の比較研究に興味を抱く筆者にとっては関心のあるところである。

ここで想起するのは数年前筆者が「中国社会史論戦」について，某日本人中国研究者の先学に質問した返事に「中国社会史論戦ですか，あれは日本の資本主義論争を真似て中国の連中がやった論争で，大した内容をもたないものですよ，戴君」と返ってきたことをである。わたくしが矢沢論文を検討し，読み進むうちに感じることと，矢沢氏が「中国社会史論戦」に下すダイナミズムを欠く評価（後述参照）とあわせて，矢沢氏が自覚しないままに日本人中国研究者が伝統的にもち続けてきた体質を軽重の差こそあれ継承しているとみるのは，筆者の独断であろうか。

この伝統的体質とは，いみじくも矢沢氏の先輩田中忠夫が㉜論文において「かかる中国社会科学は，××の×の中にも，××××を通じて発達して来ており，また今後も発達するであろう。しかしこれらの事情は，吾が旧中国研究界からは目を閉ぢ，締め出されて，受け容れられてゐない，甚しきは，『中国の書物を通じて知識を吸収するまでには，中国は発達していない』とさえ極言する中国語学者がゐる」(注7)と嘆き，池田孝が㉚論文の訳者注にそれをうけて「かくまでに熾烈に，彼の国に於て中国社会史の発展段階如何について論争が重ねられて居るにもかゝはらず，我が国の支那研究界は依然として惰眠を貪りその一端をすらも，これ紹介しようとしない。彼等旧中国研究界の或る者は，その甚しきに至っては，『中国の書物を通じて知識を吸収するまでには，中国は発達して居ない』など，誠に呆れたことをすら平気で言って居る。彼等を称して認識不足者だと言うよりはむしろ彼等は中国研究を標榜してこれを飯の種となして居る蠹賊であって，中国現代語を読み得ない者だと断言せざるを得ない」(注8)と言葉はげしく弾劾したその体質のことである。

筆者はもちろん中国におけるマルキシズムの発展が日本を媒体にした側面をもっていたことも，王亜南をはじめとする何人もの著名な中国人マルクス経済学者が河上肇博士の門下生であったことも，また速成日本語で以て補い漢字を頼りに日本訳のマルキシズム関係文献や日本人研究者の諸業績を一日でも早く吸収して自らの分析の手段に化するべく努力した歴史を中国人知識人がもっていたことを承知している。しかしこれはあくまで「中国におけるマルキシズムの発展と日本がそれにおよぼした影響」というテーマで研究すべき課題であっても，上記の状況の存在から直ちに日本における論争がなんら根拠を示されないままに，中国の論戦に深く影響したと短絡した発言を許容するものではなかろう。

事実，中国における社会科学の発展のあとをたどってみると，「中国社会史論戦」が始まって間もない1928年頃から論戦たけなわの1930年代初頃を中間期にし，「中国農村社会性質論戦」が盛んに行なわれた1935～36年頃までの約10年近くが一つの劃期となっており，それはまた1949年10月1日以前の近代中国における社会科学の飛躍的な発展期でもあった(注9)。

飛躍的な発展は上記期間における社会科学関係の出版状況にみられる。当期間に刊行された社会科学関係の古典と入門・啓蒙書の翻訳ならびに中国人研究者が自ら社会科学の方法論を駆使して行なった中国研究の業績は質量ともにそれまでのいかなる時期に比べても優れたものがあったのである(注10)。

次にわたくしが劃期となったと書いた意味についてもふれておこう。すでに⑨論文の項において，大塚令三が「社会科学に関する資料又は訳書の多くが日本語からの重訳又はその影響を多分に受けてゐるにも拘らず李氏（李季）の『馬克思傳』は全然英独書に基づいて書かれたものである」と指摘しているようにこの時期（1928年頃）以降の中国における社会科学界はそれまでの翻訳模倣から急速に自らのグルントに立って研究を始めたばかりでなく，自らの問題の深層に向かって穴を掘り進めてゆくのであった。その主な担手もそれまでの主流であった日本留学生およびその出身者に加わって，ソビエトロシヤ，ドイツ，フランス（アメリカ留学生はマルキシズムよりか非マルキシズムの社会科学に偏っていた）などの帰国留学生が強力にその一翼を担って活躍しはじめるのであった。矢沢氏が「中国社会史論戦」を論ずるに当たって主に依拠した『読書雑誌』の中国社会史的論戦専号のⅠ—Ⅳまでの論戦の旗手の大半が，非日本留学出身者によって占められている事実からもその一斑はうかがい知れよう。そればかりでなくアジア的生産様式論争のソビエト・ロシヤの旗手のひとりであるエル・マデヤールの一連の著作，たとえば「アジア的生産方法」(『満鉄支那月誌』第7年9号，1930年9月所載)，「支那農村経済の統計に就て」(同じ第7年11号，1930年11月所載)のいずれも宗華の中国訳『中国農村経済之特性』（1930年7月，上海北新書局版）からの重訳である。宗華の中国訳本にたとえ，田中忠夫が書評(注11)で指摘するような誤訳があったとしても，この史実は中国社会科学界の当時の新しい息吹きの一部を伝えてあまりあろう。

話をもどそう。矢沢氏の中国と日本の比較における第2の問題は，論争における問題意識の相違の指摘に見出しうる。先にも掲げておいたように，矢沢氏はその相違を日本の場合は中国におけるような革命の盛りあがりはやってくるだろうか，即ち革命の条件はあるかの問題意識を欠いた理由として，両国における革命経験の有無というちがいによると考えるといい，さらには両国の共通した問題意識として「(2)革命の性質はブルジョア革命か社会主義革命か（中国社会は封建社会か資本主義社会か）」「(3)中国革命の対象は帝国主義と封建勢力か（帝国主義が中国におよぼしている影響はどのようなものか，封建勢力は存在するか）」の二つをあげる。

問題意識の(2)はいいとしても，(1)と(3)についての言及はあまりにも手軽に失するのではなかろうか。本来(3)の「革命対象が帝国主義と封建勢力か」の問題提起において，当時の日本は自らが帝国主義である以上中日双方の共通した問題意識とはいえないはずのものである。思うに誤まりの根源は王礼錫の「帝国主義在中国所発生的作用」(注12)を「帝国主義が中国におよぼしている影響はどのようなものか」と不十分にしか翻訳できなかったことからくる認識の誤まりにあると考えられなくもない（因みに正しい翻訳は，帝国主義が中国においてはたしている役割は……とするか，もしくは意訳して帝国主義が中国に侵略していることで中国に及ぼす影響は……とすべきであろう）。

残念ながらわれわれは矢沢氏の間違った認識は，氏が自らのほんとうのグルントから問題接近につとめたのでないことからきたものと指摘せざるを得ない。それがゆえに，中日両論争の比較において，日本側に問題意識の(1)が欠如した理由をいとも簡単に革命の経験がなかったことに帰することとなったともいえよう。

筆者の贅言をまつまでもあるまい。問題意識の(1)の欠如の真なる理由は決して革命経験の有無にあるのではなく，より根源的には革命に向かわざるを得ないさし迫った状況の両国における違いが，もたらせたものと考えるのが論理のすじ道であろう。言葉じりをとらえてケチをつけていると誤解されるかもしれないが，事は矢沢氏の「中国社会史論戦」の評価ととらえ方の基本的態度ともかかわる問題だけに，あえてとりあげるものである。

(ロ) 『読書雑誌』発刊前後の事情に関連して

先に進もう。矢沢氏は⑩論文において「当時の中国革命運動はコミンテルンおよび中国共産党に指導され，そのなかで農村工作を重視した毛沢東らと，都市工作を重視した瞿秋白，李立三，陳紹禹らとの対立があった。コミンテルンは後者に近かった。毛沢東らが正しかったわけだが，後者はロシヤ10月革命における権力奪取の構図をそのまま中国革命における権力奪取の構図とし，中国革命の長期性を認識できなかった。この点は中国の革命的条件の問題であり，社会史論戦でも問題意識にのぼっているが，社会史論戦ではほり下げられていない。」とまず中国革命における中共の動きと「中国社会史論戦」を対置させながら論戦の否定面を指摘している。当時期の

中共とコミンテルンの関係のとらえ方に微妙な前後矛盾と事実誤認らしきものを含んでいるが本稿とは直接関係がないのでふれないにしても，革命的条件の問題に対する認識を革命の長期性（裏がえせば革命が長期か短期かを）を認識する問題に矮小化して把えているのは問題であろう。

それ以上に大きな問題は中共内部（コミンテルン内部と中共とコミンテルン間を含む）の革命的戦略・戦術の論争（それにともなう指導権をめぐる抗争を含む）を「中国社会史的論戦」と相対置（矢沢氏はかならずしもそれを明確にしていないが，氏の文脈を筆者なりに敷衍していくとそう読める）して論ずるのは「中国社会史論戦」を主として『読書雑誌』の専号Ⅰ—Ⅳに依拠して把えることにとどまったことで初めて可能な論理の進め方であろう。この論理の延長線上に氏は上記の評価に続けて「現実にはコミンテルンおよび中国共産党の指導に対する肯定と反対という性格，またスターリン主義とトロツキー主義の対決という様相をおび，政治闘争化した。」と判定する。論戦の実態は，またその背後にある政治状態がはたしてそういう結論を引き出させるようなものであっただろうか。

われわれはこの間の状況をもう少し明確化させるために，論戦のそもそもの始まりと『読書雑誌』の発刊の周辺の事情を他の資料を参照しながらあとづけてみることとしよう。

論戦の新生命派の大将格であった陶希聖の思出の記によれば，「湖北省党部改組委員会（国民党の）孔文軒と鄧初民（中共政権成立後山西大学の学長）らが（武漢政府崩壊後）上海に潜入し『雙十(月刊)』を創刊，本誌において「中国社会は如何なる社会であるか」の問題を提起した，これを契機に熱烈なる討論を引き起した」とし，さらに「(同じ頃)左翼分子も月刊誌を出していた，この雑誌は最初『思想』と名づけていたが，その後度々誌名を変えた。本誌においても中国社会は封建社会である，もしくは半封建半資本主義社会であると主張する長篇の論文が発表されていた。」と後述する郭沫若らの左翼がこもった『思想』誌のことを暗に言及する(注13)。自らのことについては「何公敢の組織した独立青年党の機関誌の一つである『独立評論』(1926年に創刊)を主宰し同誌上で「民族自決」，「国民自決」と「労工(労働者)自決」を標榜したことを契機に国民党と連ながりをもち始めた」といい，さらには「『独立評論』において偶然に発表した短文——中国の社会組織は士大夫階級と農民を主要な階層にしていることを示す，あわせて士大夫階級の発生，発展ならびにその没落を簡単に分析した——この短文は友人の激賞を得えた反面，同時に左右双方の批判をあびることになった」(注14)「その後2年間の「経歴」（生活体験とでもいうべきか）と思考を経て，私の社会組織に対する認識と分析の能力は一段と深まった，私が『新生命』月刊に発表した論文は徐々にこの問題についての論断と論争に集中した。1928年8月から12月にかけて『新生命』に発表した私の論文は多方面の関心を引き起した」(注15)と記している。

陶希聖の発言を1928年（すなわち「中国社会史論戦」の前哨戦がたけなわの頃）にさかのぼって紹介しよう。洛陽の紙価を高めた陶著『中国社会之史的分析』の緒論の六「結語」において陶は「作者はこの小著が広大にして深刻なる論争を引き起すことを希望すると同時に，論争中の大作を収録して『中国社会史討論集』を編纂し，学者ならびに，同志の参考と批判に供したいと準備している。広大にして深刻に，国の内外にまで波及している中国社会史の論争の真只中において，著者は敢えてこの小著をもって論争に参与した記念としたい，1928年12月1日，上海」(注16)と積極的な発言をしている。

この頃の状況を伝えてくれるもう一つの資料は筆者が先に提示した文献のうちの③の単行書に見出される。本書においてウィットフォーゲルの中国滞在期間中（1935～1937年）の協力者のひとりであった王毓銓は『読書雑誌』創刊以前の論戦について「たしかに国民党左派の陶希聖グループを代表する『新生命』により，又熊得山(熊は熊子奇の名で『雙十月刊』に論陣を張り，後にこれを一本にして『中国社会史研究』〈上海崑崙書店，1929年〉として出版した)(注17)や1928年に古代支那に関する論文を発表し始めた郭沫若を含む急進的グループを代表する『思想』によって或る程度先鞭をつけられてゐたが」と示し，論戦の次の発展として「社会改新の次の段階を決するためには，支那社会の性質を完全に理解することが必要だったから……かかる要求に応ずるために，若い急進的な学者の一団が1930年に『新思潮』を刊行し始めた。これらへの寄稿者達は支那社会は今日に於て半封建的であるという点で一致した。他のグループは1931年に創刊された『動力Der Motor』に拠り，支那社会は半殖民地的資本主義的性質なりとの説を固持した。次いで出た『読書雑誌』は支那社会史研究に新段階を劃した。」(注18)と記述する。

われわれはいよいよ『読書雑誌』の創刊の事情を同誌

の関係者の証言を通じて明らかにしなければならない段階にはいってきた。

『読書雑誌』の「中国社会史的論戦」専号Ⅲに登場した当時の若き論客学稼（鄭学稼のこと）は戦後台湾において『「社会史論戦」的起因和内容』（1965年，台北中華雑誌社発行）を著わし，そのなかで「『読書雑誌』は中国社会性質問題を探究せんとする雰囲気の中で創刊された。神州国光社（同誌の発行元）はもとをたずねれば中国の古美術，書画等を出版していた店で，後に19路軍の陳銘樞の買収するところとなり，かえて社会科学書を出すようになった（この書き方は厳密さを欠く，筆者が所蔵する1936年版の『神州国光社簡明書目』＜出版目録＞でみる限り，社会科学書に重点はおかれているが文学関係，芸術類書，「書画碑版」もかなりの割合を占めている）。編輯を主宰した王礼錫は国民党員で，江西省のもっとも早い時期の反共団体であるＡＢ（Anti Bolsheviki の略）団の関係者である。『読書雑誌』は王氏が渡日した機に編輯が始められたもので，彼は一部の日本留学生例えば胡秋原，王亜南，朱雲影，汪洪発等と連絡をとり寄稿を依頼した，依頼した人物の中には前国民党員で，前共産党の要人でもあった梅電竜＜寵彬＞もいて，上海における編輯責任者は彭芳草であった。陳銘樞と王礼錫が神州国光社を始めたのはあるいは政治的意図があったかも知れないが，執筆者は広範囲の人物にわたり，必らずしも，彼ら両者と同一の政治主張をもったわけではない」(注19)と記録する。

この間の事情を鄭が寄稿者に依頼された人物のひとりであるとあげている胡秋原（かれは鄭著の出版元である中華雑誌社の実質的な社長で，形は同社が発行している『中華雑誌』＜月刊，1963年８月16日創刊現在に至る＞の発行人，いうまでもなく論戦の旗手のひとりでもある。）は「1930年羅貢華が来日し，神州国光社が改組され，19路軍の関係者がそれを受けつぎ，盛んに新書を出していると伝へ，さらに同社の総編輯は彼の友人王礼錫が当っているともいう。そこで，彼と私と王亜南と楊玉清の四人で「白沙社」という「編訳社」を結成し，私はフリーチエの芸術社会学を訳して神州国光社に渡し，白沙叢書の一冊として出版させた。しばらくして王礼錫が来日した。彼の主宰せる『読書雑誌』は最初日本において編輯したものである」と書く(補注)。

鄭は胡の友人で，鄭著は胡の主宰する中華雑誌社から出版されているばかりでなく，一本になる前は『中華雑誌』において連載し第３巻２号～６号，1965年２月16日～６月16日）されたものである。以上の経緯から鄭の記す『読書雑誌』ならびに神州国光社の社の性格や王礼錫のことなどは当然胡は編集過程で一読（事実鄭著によれば『読書雑誌』所載論文の多くは胡が鄭に提供したものである）していることが想定できるから，鄭の記述をそのまま受け入れていいものと思われる。

王礼錫がＡＢ団に関係したことを指摘したのは鄭が最初でない，日本においても先に提示しておいた㉕論文において小島（重雄？）が詳しく王の略歴を紹介するなかでＡＢ団に加入した経歴をもあわせて書いている(注20)。

19路軍の陳銘樞と神州国光社の関係から『読書雑誌』をみた場合，陳が蔣介石と一定の距離を保ちながら交通部長，京滬（南京，上海）衛戍司令を担当したのが1931～32年，日本軍の上海侵攻で19路軍の陳の部下蔣光鼐，蔡廷鍇が勇名をはせるのが32年１月，その後福建に移駐を命ぜられ下野して反蔣にまわり，社会民主党派と組んで福建人民革命政府をつくるのが33年11月～34年１月，これを『読書雑誌』の創刊と特集Ⅳの刊行日が1933年４月１日であったことを想起すれば，『読書雑誌』がいかなる権力を背景にして論戦特集の大増刷をしていたかが一目瞭然となろう。

話をもどそう，論戦の前哨戦（1928年）から『読書雑誌』の専号Ⅰが出される1931年までの３年間，武漢政府の崩壊にともない上海へとおちのびて集まった中道から左翼までを含む知識人は革命の挫折感にさいなまれただけでなく，国共合作のぬるま湯のもとで反帝，反封建軍閥を唱えておけば自らの政治的立場特に階級的立場を明確にしなくてもやってこれた，いわば，「革命」の錦の御旗の下での“仲良し”ムードは今やだめとなったのである。コミンテルンの内部抗争と中共に与える指令の混乱は革命挫折感にうちひしがれた一部の中共系知識人の動揺とコミンテルンに対する不信感をももたらしたことは多くの人が書いているところである。中共内部における分裂でできた「解消派」（陳独秀を代表とする）トロツキスト派（劉仁静など）の反幹部派（当時の中共主流を幹部派と別称）活動だけでなく，社会民主主義者や国民党内部の改組派，民族改良主義者，自由主義者などがこれを機会に宣伝活動を盛んにしはじめる。このような状況下に中共が出したのが「中国社会科学家聯盟綱領」（1930年９月10日の『世界文化月刊』創刊号に登載）であった。

綱領の骨子は「革命的マルクス主義」の擁護と「非マルクス主義思想……民族改良主義，自由主義及びエセマ

ルクス主義的理論――社会民主主義，トロツキー主義及び機会主義」の排斥と，系統的に中国の新興社会科学運動の発展を指導し，正しいマルクス主義の宣伝を拡大する任務をもつと主張した(注21)。

『読書雑誌』はこのような，初めから中共と対立するような体質（王礼錫は同誌の誌面において，発言の場をもたない，孤立した人々のために誌面を公開すると強調している）を先天的にもっていたといえよう。

『読書雑誌』の執筆者に中共系の著名な人物がいないのはまた当然である（王亜南，李達などは当時明確な政治的立場に立っていたとは思えない。いわば未分化状態におかれていた，政治的実践を敬遠し，マルキシズムにだけ興味をもっていた知識人の群の一部とみなしてもいいと思われる）。

前記の綱領の発表の後で『読書雑誌』は創刊されるわけで，神州国光社のパトロン陳銘樞，『読書雑誌』の編集長王礼錫の政治意図が奈辺にあったかは今もって調べがついていない。

それはともかく，執筆者には有名なトロツキスト，鏡園(劉仁静)，解消派として陳独秀とともに除名された李季，厳霊峯，論戦時にトロツキスト派の立場に立った杜畏之は厳と同じくモスクワ帰りである。同仁と執筆者に王礼錫がＡＢ団関係者，胡秋原が反幹部派的論客，さらには神州国光社から出している「文化評論」を胡と共編していたかつての共産党幹部梅龔彬（1931年７月日本の監獄から釈放となって幹部派を離脱したといわれる(注22)などが神州国光社（19路軍がパトロンであることも含んで）の有力な幹部とあれば中共ならびにその周辺に位置する文化人の集中砲火を浴びるのもまたきわめて当然なことであろう。

矢沢氏が先に述べた「コミンテルンおよび中国共産党の指導に対する肯定と反対という性格，またスターリン主義とトロツキー主義の対決という様相をおび，政治闘争化した」とする見解はまず二つに分けて考えなければならない。政治闘争の実質的な場は『読書雑誌』の紙面には（紙面内部のそれはある意味ではコップの中のあらしみたいなものと考えるべきであろう）なく，むしろ『読書雑誌』を利用した反幹部派的言論を中共系の旗手は外（他の紙面において）に迎え打つ形をとるとみなして大過ないであろう。

トロツキスト派以外の人物で『読書雑誌』に登場してくる代表的人物は1927年革命でほうほうの体で武漢→広東ルートを郭沫若とともに辿り，やはり上海に身をかくす一匹狼的存在の朱其華(新繁)と先にあげた陶希聖らがいる。社会民主党の理論家の別の顔をももつ王と胡らを含んでかれらはともに当時の南京政府には容れられぬ人物の集まりである。「上海事変」における対日抗戦で南京当局の逆鱗にふれ，それから発展した「閩変」（先にあげた福建人民革命政府樹立運動のこと）は抗日を抑え，掃共を優先した南京主流派に対する反発と，王・胡らが論戦を通じて模索しえた（とかれらは考えた）国，共以外の第３の道の政治的実践が19路軍と結びついて演出したものと考えても良いであろう。『読書雑誌』がパトロンの陳銘樞が下野するにしたがって右側からの圧力が加圧されやりづらくなり王礼錫の出国となり編集のバトンを受けついだ胡が「閩変」に参加する過程で社会史論戦で，若き学徒と学生らの喝采をあびた『読書雑誌』も廃刊となったのである。

ここで想起するのは(4)論文において野原四郎教授が同誌を「日本の左翼は，福建革命（閩変のこと）に対する彼らの評価と関連して，本誌を純トロツキストの機関誌とみなしている」と書くが何に根拠をおいて日本の左翼がそう判定したのかが不明であるが，これまでの説明でも明白のように純トロツキスト機関誌とはいいがたいのである。なお野原氏は同論文において「論争の焦点は，中国社会をなお半封建社会とみるか，すでに資本主義社会とみなすかにあったが，前者（正しくは後者であろう）を代表した執筆者は王宜昌，任曙，厳霊峯ら，後者（正しくは前者）のそれは朱其華，胡秋原，劉夢雲らで……」とも書くが，文中のかっこのように補正すべきであろう。

『読書雑誌』は決して純トロツキスト機関誌ではないことはこれまでの説明で十分であろう。反対派をすべて一緒くたにトロツキスト呼ばわりした当時の政治事情の日本における反映をそのまま未整理で放っておいたとみるほかない。冷静に考えてみるとき，神州国光社がはたした役割は直接中共を支援しなかっただけでなく，むしろ批判を積極的に展開したことで政治や思想の混乱を学生，知識人層にもたらしたことは一面で事実である。しかし19路軍のバックアップがあってはじめて可能となったと考えられる合法的なマルキシズム宣伝（出版物一覧を先にあげた「簡明書目」に徴するとはっきりしよう）がはたした役割をもあわせて新たに評価していいものと思うがいかがなものであろうか。因みに陳銘樞は目下北京にて余生をおくっている，書斎派マルキシズム研究家の李季も大陸に健在で訳業にいそしんでいると聞くにつれ，政治の複雑さ，微妙さに一段の感慨を抱くのは筆者

独りであろうか。

われわれは長文にわたって『読書雑誌』の周辺の事情を整理してきた。もし健忘でなければ，社会史論戦が始まって間もない1928年は5・4運動が始まる1919年を隔てること10年に満たなく，中共創立の1921年からわずかに7年，この間に主な政治・軍事の大事件だけでも5・30事件(1925年)，1926年3月の中山艦事件があった。それに続いて北伐，1927年4月12日の上海クーデタ(この間に起こるコミンテルンの分裂，スターリンとトロツキーの抗争，それの中国革命における反映)，同8月7日の中共の8・7会議(この間の南昌暴動と湖南・湖北・広東・江西4省における秋収暴動)，同11月の海陸豊ソビエトの樹立，28年7月の中共6全大会（モスクワ）もまたあった。『読書雑誌』における論戦がたけなわの頃はちょうど国民党によるソビエト区包囲作戦(30年末～33年10月)この間に「満州事変（31年），上海事変（32年）などと矢継早やに起こってくること実に波乱万丈の激動が短期間に中国にあった。この中で国民党左派を含む進歩的知識人がいかなる思いで中国のゆくべき道を模索し，革命のエネルギーを何人に求むべきかを深刻に自らのグルントに立って究めなければならなかったかをおし計ることができよう。

上記の全体的状況を把握した上での論戦の位置づけを試みる姿勢があれば，論戦を『読書雑誌』の専号4冊にとじこめることもなくなるであろうし，評価を静態的に判定してしまう誤まりも犯さなくともすめることとなろう。また性急かつ安易に革命実践にまつわる戦略・戦術論創出の過程と社会史論戦をむすびつけて，両者間の関連を実態把握の欠如下に判定を下すこともまた避けられよう。

2．戦前……田中忠夫，池田孝両氏の業績を中心に――

資料の提示においてもわかるように，当時の中国の社会科学界の動向に敏感に反応し，それを日本に反映しようと努力したのはほかでもない『満鉄支那月誌』と『東亜』であった。

研究主体でいえば伊藤武雄氏を中心にした満鉄調査部の上海事務所研究室のメンバー，天野元之助，宮本通治，大塚令三らの諸氏である。当時かれらが何を考え，何を意図してこれを行なったかは小島麗逸氏(当研究所所員)の『満鉄支那月誌』についての詳しい解題と研究の公刊(注23)に譲るとしても，同誌の残した資料的価値は学界の貴重な遺産となろう。しかしこの遺産がプラスとなるのは，あくまでわれわれが先学の業績を現代中国，ひいてはアジアの研究に生かし，その上で正しい中国・アジア認識を確立できて初めて評価がきまるものであることはいうまでもない。

それはさておいて文献リストを一覧するに，翻訳紹介は『新生命派』(国民党左派)の陶希聖と，中共幹部派すなわち論戦史上における『新思潮派』に近い朱其華（新繁）――しかし朱は決して『新思潮』派を代表できる人物ではなかった――にかたよったのはいかなる理由によるものであろうか，たんに同誌の同人のひとりである天野氏が陶と朱と懇意であっただけの理由でそうなったのだろうか。『新思潮』の王学文，潘東周らの論文(当時の中共に近い立場もしくはそれを反映したともいわれる）が本誌に訳載されていないのは当時の政治情勢（学問の自由との関連）によるものであるか，あるいは個人の好みによるものか，はたまた，田中忠夫が同派の代表的論文の訳業を進めていることを知った上での「偏り」なのだろうか。わたくしには不明である。後者に理由があったことと考えたい。

紹介の全般的な流れの中に，当時の中国学界の動向や，研究者のプロフィル（必ずしもすべてが正しく報ぜられたわけではないが，クリティークすれば利用可能），出版事情の敏感な報道は有難い。このような当時のいきいきした状況を伝え残してくれている資料を身近かにおきながら，同時代の研究者でない戦後世代の研究者がそれを操作して歴史の「臨場感」を十分培った上で論文を書いた例を管見にしてそれを知らない。社会史論戦といえば『読書雑誌』という安逸な接近は現在横行しているようにわたくしなどには見えるが，これはまさに外国研究における紹介と研究間の有効な継承発展の可能性を無視することではないのであろうか。

紹介の段階からの脱皮は，先学の諸業績を批判的に摂取して有効に自らの研究にとりこんでいって初めて可能となるものであるし，研究の深化はその手続を経て促進できるものであることと筆者は考えている。

われわれが中国社会史論戦を当時の全般的な状況，論戦の旗手のプロフィル，関連雑誌の性格などに無知のままで，ただ特輯4冊の字づらいじりだけで結論を出すような研究は解釈とはなっても（それも決して正しい解釈とはならないであろう）本来の意味の研究には決してならないであろう。

それはさておいて本題にはいることとしよう。田中忠夫の論戦紹介の最大なる功績はなんといっても①の単行書『支那経済論』の翻訳刊行で，いうまでもなく本書は

論戦関係の代表的論文のやや中共幹部派にウエイトをおいた編訳集成書である。

因みにその構成と論文の原題と出所をあわせて再現しておこう。

第一篇　潘東周「支那経済の性質」(「中国経済之性質」『新思潮』第1巻5期—中国経済研究専号—)。

第二篇　王学文「支那資本主義の支那経済における地位及び将来」(「中国資本主義在中国経済中的地位、其発展及其前途」，原掲載第一篇と同じ)。

第三篇　厳霊峰(峯)「支那経済問題研究」(『中国経済問題研究』(1931年，上海新生命書局)の「自序」，「中国是資本主義的経済還是封建制度的経済？」，「再論中国経済問題」を訳したもので最終章ともいうべき「我們的反批評」は割愛されている。

第四篇　伯虎「支那経済の性質」(「中国経済的性質」，『布爾塞維克』第4巻2期，1931年4月)。

第五篇　夢飛「「支那経済研究」に対する研究」(「『中国経済研究』之研究」，『理論与批判』第1期)。

第六篇　劉夢雲「支那経済の性質問題に関する研究」(「中国経済之性質問題的研究」，『読書雑誌』第1巻4・5期合刊—中国社会史的論戦第1輯，1931年8月)。

第七篇　任曙，「支那経済研究」，(『中国経済研究緒論』，1931年，上海東明書社版，のうち第7章，第2節「我們的自信」と「附録」を割愛全訳)。

第八篇　劉鏡園「支那経済の分析とその展望」(「中国経済的分析及其前途之預測」，『読書雑誌』第2巻2・3期合刊，1932年3月)。

第九篇　沈沢民「第三期における支那経済」(「第三時期的中国経済」，『布爾塞維克』，第4巻2期，1931年4月)。

第十篇　亦如「支那経済問題」(「中国経済問題」，『研究』第1号，1932年4月。

以上を一覧してみるに中共の機関紙の一つである『布爾塞維克』(ボルシェビキ)掲載論文が2篇，中共寄りの社会科学者団体である『中国社会科学家聯盟が出した雑誌『新思潮』掲載論文も同じく2篇，同聯盟が出した『問題与研究』と『研究』両誌が各1篇となり，いわゆる『新思潮』派系の論文が計6篇を占めていることになる。これらの論文は今や入手はおろか閲覧も容易でないだけに伏字がある訳文とはいえ貴重な資料といわねばなるまい。

厳と劉は先にも述べたように両者共にトロツキスト派に属した(論点の対立はあったが)人物である。いずれ論戦の旗手たちの略伝をノートとして公表する予定をしているが，厳は現在国府の国大代表として台湾に健在だけでなく老荘関係の研究を余技としてやっているようである。(『中華雑誌』の執筆者のひとりでもある)。

任と劉夢雲の2人については調べがついていないが，いずれの党派にも属さない人のようである。

田中が『読書雑誌』の論戦に直接参加した唯一の日本人としても特筆に値いするもので，かつて武漢政府時代に鄧演達のそばにいたともいわれる。王礼錫もたびたび『読書雑誌』の紙上において田中を日本人の知己として扱かっている。田中の体験談，研究余滴をものにされている方がおられたらぜひとも公開をお願いしたいものである。

田中のもう一つの業績は㉜論文で，本論文は豊かな現地感覚と細くない人脈に依存して収集したと思われる多方面の資料を駆使しながら原理的な立脚点にたって，中国の社会科学の現状を実にヴィヴィドに伝えてくれている。伝統的中国研究者に対してならした警鐘(前出参照)は今もって有効であるとみるのはせんえつであろうか。

池田孝の業績は㊿論文と(51)論文の二つである。前者は李季の論文「中国社会史論戦に対する貢献と批評」の抄訳であるからふれないが，(51)論文はおそらく戦前において社会史論戦をもっとも総括的に日本で紹介した論文であろう。ただあまりにも性急な政治主義的な図式化で陶希聖をまでトロツキストに転換したと判定した(註24)のはいかがなものであろうか。

戦前における田中，池田が共に積極的に論戦を中国の具体的状況にすえおいて，動態的にそれを評価していこうとしていたのに，なぜかこの新しい芽が戦後においてねづいていないのである。論争の関係論文を吟味してゆけば問題は限りなく出てくるであろう。中国の社会科学は当時あまりにも幼なかったのだ。しかしかれらの多くが革命に敗れ失意のどんぞこにおいて自ら考えることをはじめそれが当時の学生の中国問題への接近にすくなくとも開眼の役割をはたしたといってもいいのではなかろうか。まさに論戦でやりあっている言葉そのものが当時のもっとも重要な問題ではなくて，言論活動それ自体がどう若き学生を啓蒙しかれらを革命的実践に結びつけていったのかが，かれらにとっての当時の緊急な問題であろう。たとえかれらのいうことが初め間に合わせの寄せ木細工に過ぎないとしても，かれらの論議が中国の地の上にたったもので，常に自らの内部を掘り続けてゆく姿勢をかれらが失わなければ最終的には石ではなくて玉(ぎょく)に掘り当たるであろう。

われわれの意識の中は往々にして後進国の政治家や研究者の言論や，政治主張が寄せ木細工に過ぎないと一笑に附したくなる習性がある。われわれにとって，かれらの言論や主張がたとえ寄せ木細工であって一笑に附したくなるようなものであっても，その言論がかれらの実社会で現実的な役割をはたしているものなら，われわれはわれわれの学問的趣味でわれわれの尺度でそれを云々するよりか，それらの言論や政治主張がいかなる役割を現地においてはたしているかを究めることがわれわれの研究課題となるのではなかろうか。

むすび

与えられた紙数が尽きてきた。資料提供をも兼ね，もっぱら社会史論戦の周辺を洗ってきた僅少の成果をノート形式で書き続けてきたのが本稿といっても良い。書く過程で論戦の内容に早く踏み込んでいかなければという衝動にかられたのは二度や三度だけのことではない。今なお駆られ続けているといっても過言ではない。しかし手を濡らさずに水底の石は拾えない，ましてや玉を拾うと夢を追っている男にとっては苦業は続けざるを得ないと，はやる心を抑えるに苦しんだ。

外濠を埋めるための石，それはたとえ一つであっても確実に投じておけば必ずいきてくる。砂上の楼閣での言葉のゲームや，きり貼りの論理の展開，状況の全体的把握を欠いたままの性急な位置づけ，字ヅラだけをいじくって文章をつなぐ等々の陥穽にだけははまりたくない。それがゆえに自らのグルントに立ち，自分の穴を掘り進め，そこで自らをたたきあげる，血のかよった歴史を書くためにはこれ以外には方法がないと思う。

わたくしは矢沢氏の業績にこだわりすぎた感もしないわけではない。矢沢氏との対話で自分の内部に実は刃をつきつけているのである。御寛容をいただきたい。

整理の過程で発見した最大なる宝物は問題意識さえあれば，いくらでも調べようがあることである。いわば常識的なことではあるが。

わたくしが本稿で提示しておいた文献のリストはまだまだ十分でないことを百も承知している。中国側の文献についても何幹之がいわゆる社会史論戦を『中国社会性質問題論戦』と『中国社会史問題論戦』の2冊に分けてかれなりの総括を行なったことを発見したのも今度の作業の過程においてである（両者いずれも生活書店，1937年の刊行）。

「アジア的生産様式にうかされ，ウィットフォーゲルに振りまわされた戦前の日本の中国学界にしては社会史論戦研究はあまりにも貧しいとみるのはいいすぎであろうか。中国革命が成功しちゃったことで問題はなくなってしまったとでもいわれるのだろうか，あるいは中国における社会主義建設を解釈するのに多忙で時間を割くことができなかったからなのだろうか。ヨーロッパでアジア的生産様式をとりあげると，先生方はまたあわててそれ！アジア的生産様式だと飛びつく，どうしてわれわれはこうなのか？」これはわたくしの言葉ではない。わたくしの親しくしている若い日本人の友人がわたくしにした質問否慨嘆ともいうべき発言の紙上再録である。この再録にさいして何回か破いては，また書く，矛盾した心理にあった。あえて再録にふみ切ったのは本課題をとり組むときに自戒の言葉として活かしたいことと，若き日本人学徒との心のふれあいの一つの記念として記録に残しておきたかったからである。上記の質問に対して「実はよくわからないのだ。ただ現在の中国ブームはどういうことになるのか，政治でなく，研究の場でどう考えたらいいのだろうか……」これがわたくしのかれに対する返事にならない返事であったことをもあわせて記録に残しておきたい。

心残りは，最初予定していた戦前の紹介と研究の流れを満鉄上海事務所研究室グループ，田中忠夫（暫時在中国グループと称しよう）と在東京の池田孝，平野義太郎，鈴木俊，志田不動磨ら諸氏の業績と当時の発言を発掘関連づけて整理し，芽ばえようとした科学的なアジア研究・アジアに対する認識がその後どうなっていったのか？戦後の研究と有関係か無関係かを明らかにしたかったのが力不足でできなかったことである。

（注1） たとえば(A)「馬克思傅及其学説自序」（『新青年季刊』（第3期 1924年8月所載）(B)「社会主義与中国」（『新青年』第8巻6期 1921年4月所載）。

（注2） 雲湧進編『現代中国作家筆名録』 中華図書館協会叢書第11種 中華民国25年3月 北平中華図書館協会印行 66ページ参照。

（注3） 天野元之助教授還暦記念事業委員会『天野元之助教授回想記著作目録』所載「過ぎ去った歳月」2ページ参照。

（注4） 『読書雑誌，中国社会史的論戦第Ⅰ輯』 第1巻第4・5期合刊所載 4ページ参照。

（注5） 『読書雑誌，中国社会史的論戦第Ⅱ輯』 第2巻第2・3期合刊所載。

（注6） 上掲論文21ページ参照。

（注7） 田中忠夫「中国に於ける社会科学の現状」（『唯物論研究』第14号 1933年12月）所載119ページ。

（注8） 池田孝訳 李季「支那社会の発展段階」（『東亜』第7巻1号 1934年1月）所載100ページ。

（注9） 詳しくは何幹之著『近代中国啓蒙運動史』上海生活書店 1937年12月を参照されたい。

（注10） 1)翻訳については，君素「1929年中国関於社会科学的翻訳界」（『新思潮』第2・3期合刊 1930年1月 所載，後に張静廬輯註『中国現代出版史料，2編』（北京中華書局，1957年）の7～18ページに再録。なお日本訳として「社会科学に関する翻訳出版」（『満鉄支那月誌』 第7年4号 1930年4月 の95～100ページ所載）が発表直後に紹介されている。

2)出版については，丁珉「記北方人民出版社—1931年（民国20年）」（同じく『中国現代出版史料，2編』18～21ページに採録）と王雲五「十年来的中国出版事業—1927～1936年」（中国文化建設協会編『十年来的中国』上海商務印書館版 1937年）後に同じく『中国現代出版史料，2編』の335～352ページに再録，などが参考になろう。

（注11） 『満鉄支那月誌』第7年9号 1930年9月の「支那に関する新刊図書」欄を参照されたい。

（注12） 『読書雑誌，中国社会史的論戦第I輯』 第1巻第4・5期合刊所載 4ページ参照。

（注13） 陶希聖著『潮流与点滴』台北 伝記文学出版社 1964年12月 109ページ所収の三，所謂「社会史論戦」の2ページ。なお陶の文中のかっこは筆者の付記である。以下同じ。

（注14） 陶 同上書 81～82ページ参照。

（注15） 陶希聖著『潮流与点滴』 台北 伝記文学出版社 1964年12月 109ページ。所収の三，所謂「社会史論戦」の2ページ。なお陶の文中のかっこは著者の付記である。以下同じ。

（注16） 陶希聖著『中国社会之史的分析』上海新生命書局発行 1929年1月30日 16ページ。なお日本語訳は東亜経済調査局発行の『経済資料，第15巻第10・11号，支那社会の史的分析』として，1929年11月1日に刊行されていた。

（注17） 『読書雑誌，中国社会史的論戦第II輯第2巻第2・3期合刊 12ページ参照。

（注18） 平野義太郎・宇佐美誠次郎訳，ウィットフォーゲル著『支那社会の科学的研究』岩波書店 同新書 1939年4月 所収の附録「支那における近代的社会科学文献史」166ページ。

（注19） 鄭学稼著『「社会史論戦」的起因和内容』台北中華雑誌社発行 1965年 5ページ。

（注20） 小島「支那の社会科学作家(三)」（『満鉄支那月誌』第9年11・12号 1932年12月所載）37ページ参照。

（注21） 当時の中国共産党が社会科学界に対してとった態度は「中国社会科学家聯盟綱領——1930年」（『世界文化』創刊号 1930年9月10日所載，後に前掲『中国現代出版史料，2篇』32～34ページに再録）に集中的に表現されている。発表時期は『読書雑誌』の創刊以前であるが参考となろう。

（注22） 前掲小島論文(二)（『満鉄支那月誌』第9年8・9・10号，1932年10月所載）81ページ参照。

（注23） 当研究所調査研究部の「中国関係新聞・雑誌研究会」（主在・江副敏生<中央大学教授>，幹事・小島麗逸（当研究所所員）の業績の一部として近刊の予定である。

（注24） 池田孝「支那における支那研究の回顧と展望」（『東亜』第7巻8号 1934年8月所載）41ページ参照。

（補注） 胡秋原著『在唐三蔵与浮士徳之間』 台北 1962年（因みに本書は胡の自費出版） 4ページ。

（調査研究部 主任調査研究員）